

生命の實相

第2卷

萬教歸一篇「下」

(137)

第一章 万教一つに包容す

人間は神の子でありますから、神の道は人間の道、ふつうの道であつて、難行苦行の道ではないのであります。「道というものは、すべてを捨てなければ得られない」とあなたは今おっしゃいましたが、正にそうであつて、すべてを捨てる、すなわち難行苦行という道さえも捨てきつたとき、本当の道が出てくるのです。

その本当の道は、平凡の道であります。この平凡な道が飲んで歩めるようになったときに、その人は本当の生活に入つたのであります。外面を見て花々しい生活をしたら生き甲斐があるとか、大いに世の中の人を助けたから生き甲斐があるとかいうのでは本当ではない。そんなことで、外面に花々しい生活ができなかつた時や、大いに世の中を益することができなかつたときには生き甲斐が感じられなくなります。そんなことではわれわれの生き甲斐というものは外の成績によつて左右されているので、神の子たる生命の実相を知つた人の「生き甲斐」ではなくなるのであります。

先日、東京へまいりました時に、非常に信仰の深い牧師が神経衰弱にかかつている話を承^{うけたまわ}りましたが、その牧師が神経衰弱になつた理由がなんであるかといひますと、予定どおりの人数をキリスト教に導くことができないから、神様に対して申しわけがないというのであります。つまりこのような人たちの生き甲斐というものは、外の成績に左右されているのであつて、実相の悟りをつかんでいる生き甲斐ではないから、外が打ち負かされたら神経

衰弱になるのであります。キリストはこの点では実相を掴んでいたので、外の形の上、数の上で打ち負かされても、生き甲斐が感じられたのです。「右の頬を打つ者があれば左の頬を打たせよ」とか「外衣^{うわぎ}をとらんとする者には下衣^{したぎ}をも与えよ」とか「十里の公役を強いられなば二十里を往け」などと、キリストが言ひえたのは、形の上で打ち負かされても負けるようなものが神の子たる人間ではない、本当に勝つとは形の上のことではないということを知つていられたからであります。先刻有元さんの御紹介になつた「有るものは皆吹き払へ大空の無きこそ元の住みかなりけれ」という黒住教祖のお歌のように、キリストは「無きこそ元の住みかなりけれ」の心境に入つておられたから、形あるものの上で負けても、神の子たる本当の生き甲斐が感じられていたのであります。これがわかつてくると、キリスト教も黒住教も、根本において同じ教えを説いたものだということがわかるのです。

われわれが、ひとから右の頬を打たれると、すぐに腹が立つてくるのは、自分というものが叩かれることくらいで傷つくような脆い肉身であると思つて、どんなに叩かれても傷つくことのない金剛不壊の**実相身**^{じつそうしん}であるということ**を**自覚しないからであります。自分がどんな体よりも堅い金剛不壊の実相身であるということが悟れると、誰が自分に対して殴^{なぐ}つて来ても、子供が金剛不壊の仁王様に対して打ちかかつて行くようなものであつて、腹の立ちようがない。われわれでも赤ん坊がわれわれの頬^ほ辺^{へた}を叩いて来ても腹が立たない、腹が立たないのは、叩かれても負けないと思つているからです。ところがわれわれが何によらず腹が立つのは、叩いて来られると負けれると思ふからです。だから常にわれわれは赤ん坊と角^{すも}力^{ちから}をとるつもりでおれば腹が立たないのであり

ます。

第二章 われらを浄土に救うものは何か

この話でわかりますように、阿弥陀仏の救いのお力というものは、死んでからでないといふ力及ばぬものであると信じていますと、現世にはなんの力も及ばないのでありますが、これは人間のまぢがつた思いで阿弥陀仏のお力に局限かぎをつけているのであります。だから、阿弥陀仏の救いの力に局限はない、今ここに、自分のうちまでも阿弥陀仏の力が及んでいるということに信念が転換してまいりますと、このように救いの力が今ここに現前げんぜんしてくるということになりますのであります。

それでは阿弥陀仏のお力だけがそうであつて、ほかの仏さま、神さまの力はそうはゆかぬかと申しますと、決してそうではありません。人間の靈魂をお祀りして、何々神様と称するのは別として、阿弥陀仏といい、觀世音菩薩といい、大日如来といい、不動明王といい、キリストの神といい、天地金乃神といい、天理王の命といい、生長の家の神といい、ことごとくただ一仏、ただ一神の化身けしん化現けげんでありますから、どの宗教を信じておられる方でも、その救いの力を小さく信ずれば小さく顕あらわれて来、大きく信ずれば大きく顕あらわれて来るのであります。この神仏の救いを大きく実生活にまでも顕あらわすのが「生長の家」の教えであります。

第四章 古典に顕れたる宇宙構造の中心理念

宇宙のいっさいは、時間と空間、「無限の縦」と「無限の横」との展開よりなつてゐるのであります。その展開を統すべ括くつてゐる中心を「ス」と申しますことは今しがた述べたところであ

りますが、この「ス」といふのはなんであるかと申しますと、「言葉」であります。聖書には「始めにコトバあり、コトバは神なり。総てのものの言葉によつて造らる」と書いてあります。「コトバ」は「神」である。英語でので (GOD) というのも、この「言」といふ語がゴドと濁つてゐるにすぎないのであります。それでいっさいの存在は神すなわちコトバによつて展開したのであります。その一切事物の根元たるコトバは、「ス」であり「枢すう」であり「主しゅ」であり、キリストであり、これを日本古典ではあめのみなかぬしのかみ天之御中主神と申し上げたのであります。この天之御中主とは固有名詞ではなく天球てんきゅうの御中みなかにまします主なる神といふ内容をあらわす言葉であります。いっさいはコトバでできたと『創世記』にあります。すべての言葉の根元すなわち「御中」すなわち「未発みはつの中」が「主」であります。が、「シュ」でも「ス」でもない、アイウエオ五十音を一つに歸き一した「ス」のコトバでありまして、われわれの眠つてゐる時に発するスースーという寢息の声をもつて、その言葉を類推することができるのであります。元来われわれ人間は小宇宙でありまして、宇宙に満ちてゐるコトバの見本とし縮図として、聴覚機関の捉えうる限度の波長のコトバを出し、またその限度内のコトバだけを聴くことができるのでありますから、われわれは大宇宙に鳴り響いてゐる声そのものを聞くことはできませんが、自分でコトバを出してみて、大宇宙の本質をなしている声が、どんなコトバだといふことを推察することができるのであります。それでわれわれは万すべてのことば 籟さいが一つに歸き一された睡眠中の「スースー」といふ言葉をもつて類推して、宇宙を統一帰一している本源の「声」すなわち「コトバは神である」ことを仏教では「声字即実相」だと申します。「生長の家」では念は具象化

するとて、「念」すなわち「心のヒビキ」はすなわち「形」に化るといのであります。念は無声のコトバなのでありますから、創造力をもっていて具象化するのであります。さてこの「ス」という宇宙に満つる「万籟^{ばんさい}帰一の声」が次に分化してス——ウとウの声を発生します。このウの声は「ス」という「澄みきり」の声、換言すれば潜在せる声が、まさに顕在に移ろうとして内に含む声であります。われわれの唇について考えてみましても、「ウ」の声は「ス」の声を出したまま、ただそのままス—ウと声を引っぱれば、□の形を少しも換えないで、ほとんど□を閉じたままに力を入れてみても分るのであります。この「ウ」の声は口を閉じたままでも出る。内に力を含む声であつて、胎児でも大便でも、腹の申にあつて「ウーン」とまさに出んとして、なお内に含む時に出る声が、この「ウー」の声なのであります。大便でも胎児でも、外へ出てしまつたら、もう「ウ」の声は出ない。「アーやれやれ」と今度はアの声が出る。「アー」の声は顕在の代表的声で、最も朗らかな最も単純な声であつて、舌を曲げることも咽喉^{のど}を縮めることも要らない、最も単純な形でただ口を開くだけで出る声であります。「ス」は陰陽超越して陰陽を帰一し統一している声でありますが、「ウ」は少しく外に形を顕わさんと内に籠れる声であります。女性の生殖器はこの「ウ」の声に形に具象化したもので、これが伊邪那美命の姿であります。英語では女性のことを「ウーマン」すなわち「ウーの人」というのであります。「ア」の声は、完全に外に顕われ尽くした声であつて、「頭」の「ア」、「顕われる」の「ア」、「明るい」の「ア」、「赤い」の「ア」などはこの語源が、皆この「アラワレ尽クス」意味から来ているので、男

性の生殖器は、この「ア」の声に形に具象化したもので、これが伊邪那岐命の姿であります。ここにウの声は「女性の生殖器」であるとか、アの声は「男性の生殖器」であるとかいいましても、これは必ずしも、肉体人間のもっている男女生殖器をいうのではなく、宇宙創造力の陰陽の理念をいうのであります。ただ、人間は小宇宙でありますから、われわれの肉体が大宇宙創造の陰陽生殖器を小さく見本的に形にあらわした肉体的道具をもっていることも事実であります。それで、生命の創造が、見本的にわれわれにおいて陰陽生殖器の結合によってできるのと同じように、大宇宙における創造は「ウ」の声と「ア」の声との結合によってできるのであります。だから真言密教では「ア」と「ウ」との声を尊んで、阿吽の呼吸などといひます。阿吽の呼吸によって一切万物が生み出されて来るのであります。「阿吽の呼吸」の「呼吸」というのは、「イキ」すなわちコトバのことであつて、「ア」と「ウ」との言葉の結合によって天地一切万象が生み出されるのをいふのであります。『古事記』には伊邪那岐命と伊邪那美命とが御子を生まれる段に、伊邪那岐命が伊邪那美命に「自分には成り成りて成り余れる所ひとところあり、なんじの成り成りて成り合はざる所に挿しふさぎて御子生まんと欲す」といつておられますが、この「成り成りて成り余る」といふのは、鳴つても鳴つてもどこまでも陽に朗らかに積極的に続く声をいふのであつて、「アー」の声がこれであります。この伊邪那岐命の「アー」といふ鳴り余れる、外に朗らかに出る「天」の声音と、伊邪那美命の「ウー」といふ鳴りたらずして内に含む「地」の声音と、この天と地との声音が互いに結び合つて万物が創造せられる、これは真言密教の阿吽の呼吸が、日本の古典に明らかに説明されていることに

なっているのです。このようにスの声は陰陽、顕幽を超えていっさいを統一せる「主」の声であります。「ウ」の声は内に含む「幽」の声であって、まだ外には顕われていない。「ア」の声になって初めて、「顕」の声で外にあらわれる赤く明らかな「光」の声となっているのであります。仏教でも「阿字は大日如来の本体」だといわれています。「阿」声は天地に満つる光の声、イザナギノミコトの声、イザナギの万徳を如実に顕現していられる天照大御神（宇宙遍満の光のミコトの意）の本体であるわけであります。キリスト教では、『創世記』に「神、光あれ」といひければ光ありき」というように、「光」が最初に造られていますが、これは、日本の古神道の天地創造にまず光の声なる「ア」の声が顕現したということに一致しているのであります。そして神が万物を造り給うにコトバによって創造せられたということは、「神、光あれ」といひ給いて」その言葉の力で創造し給うたということに表われているのでありまして、そのほかの、どんな方法によってもこの宇宙の万物は創造せられたのではないのであります。

三

宣宗皇帝の若いときに弟子になって、そこで修業した師匠の香巖和尚でもそうであります。これは有名な和尚さんで、香巖の撃竹といって、石が竹を撃つ音を聞いて悟りを開いたといわれる。いったい香巖和尚はそれまで瀧山和尚について修行してきた。しかし師についても本を読んでも、どうしても悟れない。何々経にはなんと書いてあるとなかなかよく喋るけれども、そのものを直接に把んでいない。先生の瀧山から、「書物にもなんに

も書いてない、人のいった言葉の受け売りではない、自分の中から出て来た自分の言葉で仏とはどんなものかといってみよ」といわれたが、どうしても答えられない。つまり仏とはいかなるものか、ということが分らなかったもので、いっさいの書物を焼き捨て、もう瀧山和尚についていることも止めて、南陽の慧忠国師の遺跡に庵をつくって、もう仏とはどんなものかということも考えずにいた。ある日竹林の側を掃除しておった。そうしたらその箒に石ころが引っかけた、その石ころがコツンと竹藪の竹にブツ突かった時に、その音を聞いたときに、竹と石と天地と自分と「一つ」——すべては「一つ」だということがわかって悟りを開いたえらい坊さんであります。われわれ心の耳を開いて聴けば、いたるところに先生がいるわけです。路傍に転んでいるところの石ころも、あの辺に生えているところの雑草も、あるいは藪に伸びている一本の竹であっても、皆われわれが本当に心の眼を開いて見た時に、心の耳を開いて聴いた時に、そこに本当の真理を語っているわけなのであります。

金光教祖は「今天地のひらくる音を聞け」こう言われた。天地なんて、どこに扉があって開いているのか知りませんけれども、扉の問題でないのであります。「今天地のひらくる音を聞け」ということは、天地はどこにあるか。たいていの人は天地は外にあると思っている。天地の中に人間が蛆虫のように生いているのだ、人間は地球のカビだと——そういうふうにいる人が多いのです。そういう人は天地のひらくる音を聞け、と言ったら、どっかに扉でもあってそこが開くのでないかと思って一所懸命に探し廻るかもしれませんが、天地のひらくる音を聞け、ということがわかるには、まず天地が自分の心の中にあるというこ

とを知らねばなりません。自分の心の中の扉が本当に開いたら天地がひらけてくるのです。外に天地があると思っているのがまちがいでありまして、自分の内に天地があるのです。仏も外に仏があると思うっているとまちがいであって、自分の内に仏があるのです。その仏を本当に出して来た時に、そこにはおのずから御利益ごりやくがあらわれてくるのであります。御利益を求めるのでない、御利益が自分自身なのです。自分自身が御利益であるのに、それに御利益をどこかにあると思って求めている。こういう心が、それが迷いの心であります。ですから「仏に書いて求めず、法に書いて求めず、衆しゆに書いて求めず、何にも求めずして、かくのごとくしてわれ礼拝することをなす」と黄檗おうはく禪師が言われたわけなのです。つまり御利益欲しいなどと考えること——そのことが大いに過あやまつているのであります。「法に書いて求める」——悟り開きたいな、などというような心が誤あやまつていなのです。「仏について求める」——仏になりたいな、などというような心がすでに誤っている。すでに自分の内に仏がまします。すでに個の中に真理がまします。すでに個の中に功德くどくが充滿しているのに、外に物を求めている。

四

生長の家に来て病気が治りましても、それは生長の家が治したのでない。自分のいのちが治したわけなんです。自分の内にすべてのものがある、自分の内にすべてのものがあるということを悟らせるのが生長の家の役目であります。外のものに頼るな。いのちひとり立てーというわけですね。いのちひとり立つ——これが安心立命であります。いのちがひとり立つ時に、その時にわれわ

れはいわゆる天上天下唯我独尊といった境地に入るのであります。天上天下唯我独尊とは何も恐れなくなることです。「転倒夢想を遠離おんりすれば恐怖なし」と『般若心経』に書いてある。転倒というのは逆さま、あべこべ、ひっくり返っていることです。夢想というのは、ないものがあると思つて夢みているウソの想いである。そのないものがあると思つて、実際とは逆さまに、内にあるところの仏性を、外に何か御利益があると思う、または外に何か自分を害するものがあると思つている——これが皆逆さまの想いである。その逆さまの想いをすっかりひっくり返して除いてしまった時にわれわれは恐怖がなくなることが、『般若心経』に書いてあるのであります。三世の諸仏もこれによつて悟りを開いたのだ——というふうに『般若心経』に書いてある。つまり逆さまの思いというものを捨ててしまった時に、その時に三世の諸仏も悟りを開いたのである。開いたというと、何かまた自分と離れたところにある扉を開いたような感じがする人があるかもしれないけれども、自分の中にある天地が開いた、自分の中にある仏性が開いた、自分の心の瞼が開いた。始めから光の中にあるのに、自分で勝手に目を瞑つむつておつたのを、その心の眼を開いたのであります。心の眼を開いた時に、そこにそのままに天国浄土、極楽浄土——ありとあらゆる功德があるのであります。しかしながらその功德を欲しいと思つて求めようとすると、把むのですから目玉が閉がつてくる。こうして把んだらなんでもふさがる。瞼でも把んだら見えはしない。それをたいていの人は「御利益欲しい」といって把むのですね。「御利益、御利益」といって把んだが最後、そこには真理の光は現われて来ない。御利益は出て来ないのであります。生長の家にかかったけれども病気が治らないな

どというような人がある。それは生長の家にかかるから治らないのです。何にでもかかることは自分を縛しばることになります。生長の家では何にも引っ掛るなという教えです。「かかる」という字は「拘かわる」ことで、くだいて言々と引っかかるということです。病氣にかかる、詐欺にかかる、犯罪に引っかかる、どうも、この「かかる」という奴はあまり感心しないのであります。拘らなくななくてはならないのであります。引っかかるからいけない。サラサラとしてのちの流れのままに本当に生きていったならば、それでそのままサトリである。そのままそこに仏が現成している。現にそこに仏が成就しているのであります。生長の家では「そのまま」という言葉をよくつかう、そのままにいたるところに仏があり、ここに仏があり、本当にありがたいのです。あそこの会場の入口で佐藤さんが拝んでいらっしゃる、安川さんが拝んでいらっしゃる、そのまま拝んでいらっしゃるのです。そのままとは執着のない姿です。拝んだらコミッション貰えると思って拝んでいるのではない。拝んだら家の家族が御利益受けるのだと思つていらっしゃるでもない。ただ礼拝していらっしゃるのです。礼拝していらっしゃるそのままに自分の中の仏が出ているのであります。またその礼拝していただくことによって相手の衆生の仏性がまたひとりに出て来るのであります。